大賞

大きな子ども

東京都世田谷区　若林（わかばやし）　麻衣（まい）

自分のものと、友だちのもの。どちらのものか分からないような部分で調和していた頃、ぼくらの世界はまぁるかった。世界はぼくらがつくるもの。力を合わせれば何だってできるさ！　と三人は笑った。それぞれの独特な視点でみんなが同じものを見ていた。それぞれの感覚で、みんなで同じものを見ることができた。ユニークなぼくらはいつでも役割を持っていて、それは素敵な三人だった。

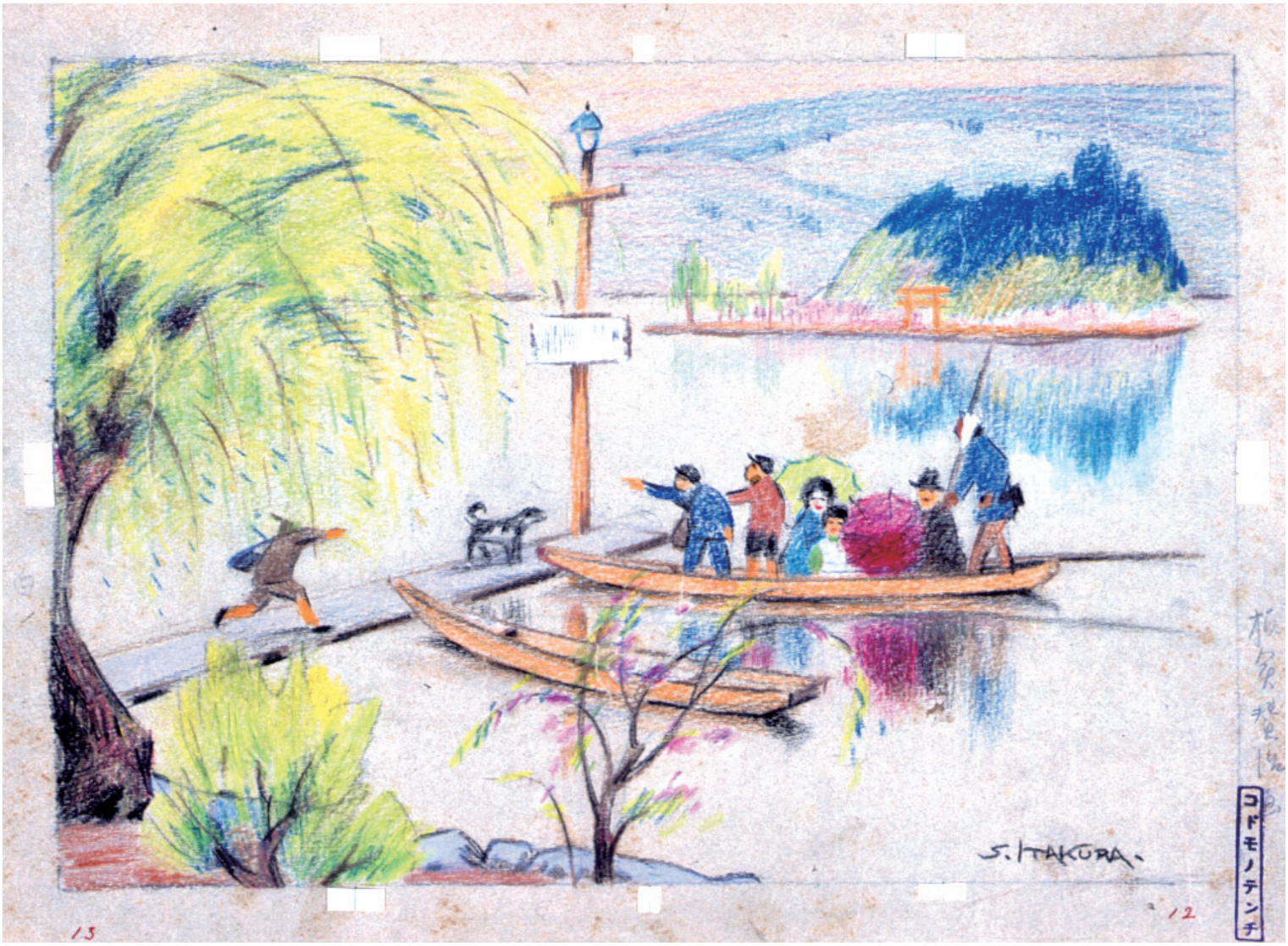
あれから長い時間が経ち、ぼくは汽車の中にいた。車窓から乾いた景色と時間がどんどん流れていくのを見ていた、その時だ。大きな子どもたちが二脚の椅子の間から笑っているのが見えた。力強く蒸気が吹き出し、黒光りする機関車から、大きな汽笛が放たれた。

準大賞

福島県須賀川市　田邉（たなべ）　ヨシ子（こ）

夢と希望とのぞみを乗せて

機関車は一番星のエネルギーを　心臓が
はちきれるほどに窯にもらいました
無限に走れる金のマークはどんな軌道も
自由自在に走れる許可証です
ミッキーの夢は月でうさぎとブランコ
あきらの希望はオーロラの輝（かがやき）で世界を照らす
幸子ののぞみは悪魔が埋めた地雷のすべてを
花と咲かそう
夢を　希望を　のぞみを乗せて
虹の軌道で世界をつないで
飛び交う銃弾を星々に変えて散らせ
人々の叡智を乗せて
スーパーシャトルトレインよ走れ
世界はひとつ　平和の軌道を走れ

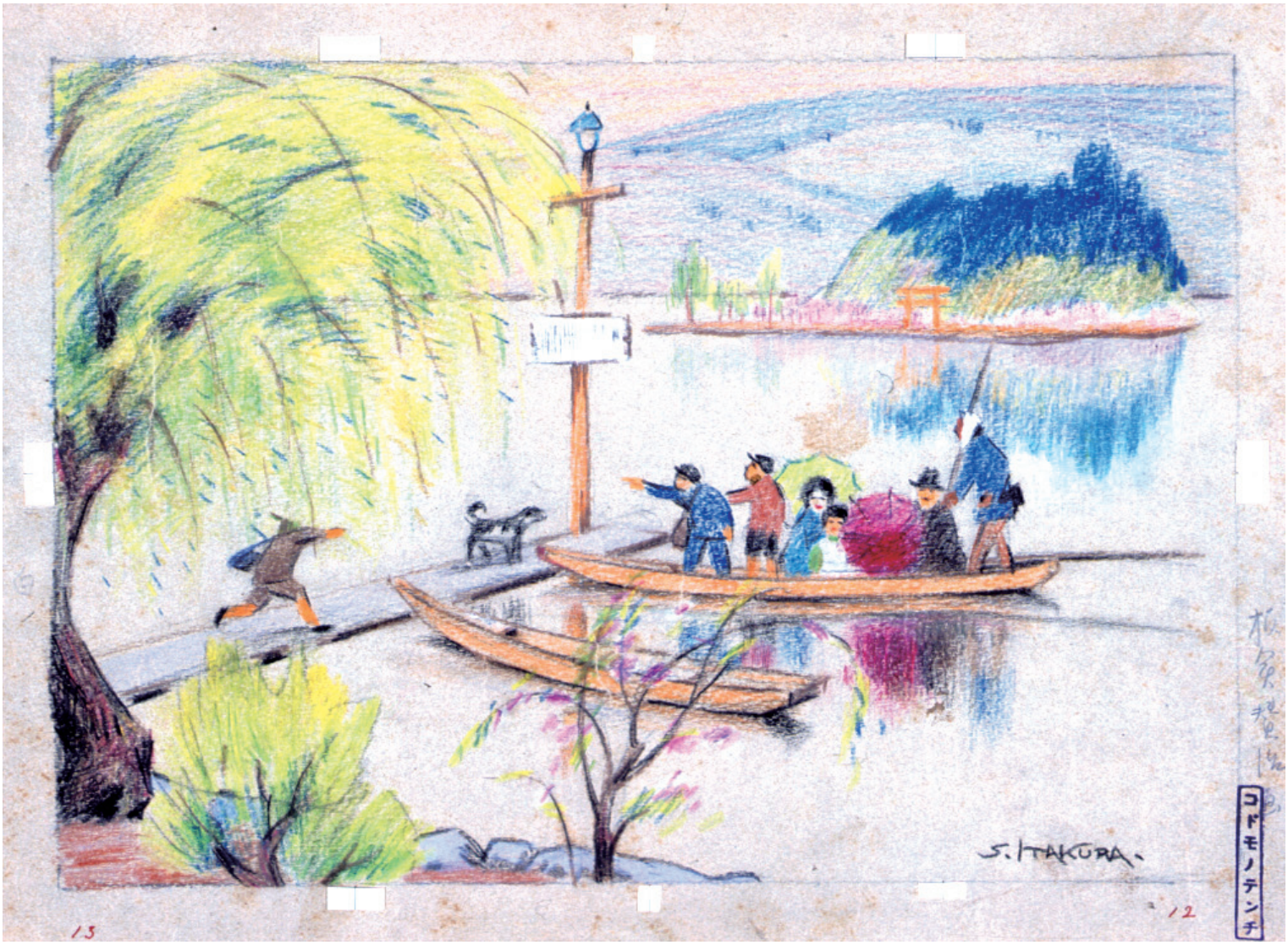


入選

退職の日

千葉県柏市　好（こう）　未来（みらい）

この絵は、爺さんが校長を退職した日に家族で離島の神社にお参りをした時のものだ。走っているのは私。爺さんが「無事に勤め上げたお礼に家族全員でお参りしたい」と言い出して急に行った事を覚えている。絵心のある母が思い出にと描いて、居間に何十年も飾られていた。その時、爺さんは「本当の感謝の気持ちは全てが終わる時に湧いてくるものだ。途中では当たり前に感じて気付けない」と言っていた。それからこの絵を数えきれない年月、何万回と見てきたが、どうしてだろうか、私は最近この絵が急に気になる様になった。絵から爺さんが私の心に語りかけてきて、これまでの人生への感謝の気持ちで涙が溢れた。今日、私も退職の日を迎える。



入選

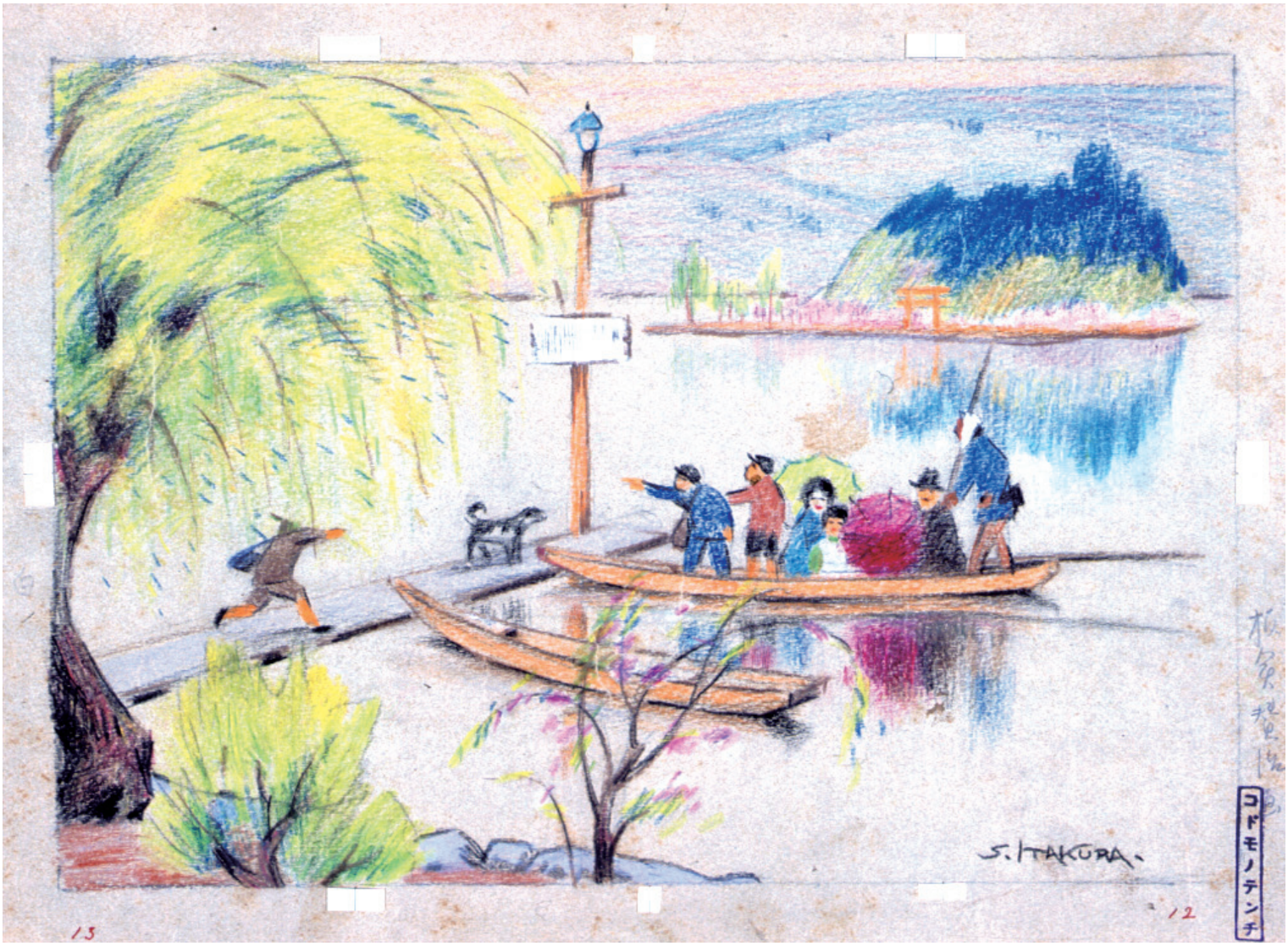
岸辺の柳

茨城県つくば市　桜山（さくらやま）　育子（いくこ）

柳は風にそよいで見ています。舟の渡し場での出会いと別れ。

東から心地よい風が吹く日、遠方に旅立つ人がいました。見送りに来た友は、柳の枝を折ると輪を作り、旅人の首にかけました。柳はこれが、旅人の無事の帰還を祈る習わしであることを、大陸からの風の便りで知りました。折られてびっくりしましたが、願いが叶いますようにと思いました。

どれだけの歳月が流れたでしょう。二人はようやく再会を果たしました。柳も一緒になって喜びます。枝のお守りが役に立ったのかもしれない。そんな柳の気持ちに二人は気が付きません。それでも柳はうれしくて、風が吹くたび思い切り枝葉を揺らすのです。

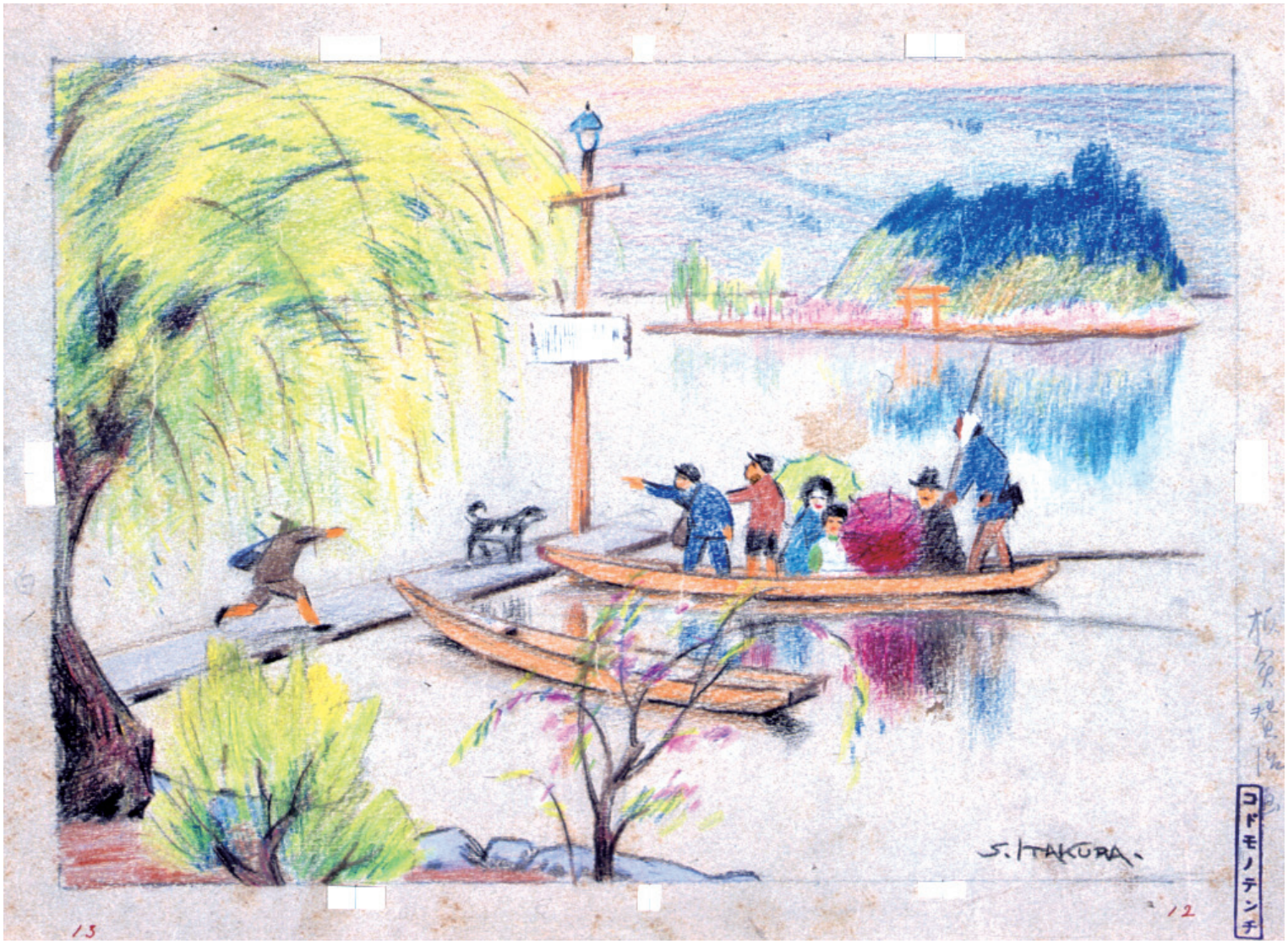


入選

七番目の男

東京都江東区　尻野（しりの）　ベロ彦（ひこ）

「待ってくれ～！」釣竿を持った男が、向こうからドタバタと走ってきました。「あっ、やっときた」「こっちだぞ～。早くしろ～」舟の上から恰幅の良い男たちが手招きをします。「時間も守れないなんて、しょうもない奴だ」長身の男はイライラした様子で、手にした棒で舟を叩きます。同舟した年かさの男たちは「まあまあ」となだめ、色白の美しい娘はコロコロと鈴が鳴るように笑いました。「なんとか間に合った～。きのう、つい飲み過ぎちゃってね」釣竿の男が汗を拭き拭き乗り込むと、舟はフワッと空に浮かびました。「正月くらいシャンとしろ！もう少しで七福神が六福神になるとこだったぞ！」毘沙門に怒られ、恵比寿はペロッと舌を出しました。



入選

茨城県古河市　高橋（たかはし）　優旗（ゆうき）（高3）

古き友

友よ。お前との村での日々を思い出す。一緒に田を植えて、山へ虫取りに行き、川で釣りをした。あの日はケンカ別れしてしまったけど今はそんなことは考えるな。とにかく走れ。走れ。走れ。あいつが帰ってくる。僕の親友が舟に乗って帰ってくる。あの楽しかった退屈することのない日々が。

こんなに人に会うのを待ち遠しく感じるだなんて思いもしなかった。あの日はなんてひどいことを言ってしまったのだろう。ずっとずっと謝りたいと思っていた。舟に揺られながらもんもんと考えていると船着き場に着いてしまっていた。すると山道から飛ぶように降りてくる彼と飼い犬の姿を見た。「ケンちゃん。」二人の顔から涙があふれた。

入選

小さな世界

愛知県刈谷市　竹内（たけうち）　佐永子（さえこ）

駅でお母さんと男の子が電車を待っています。男の子が不思議そうに言いました。

「ねえ、橋が高くなった気がする」

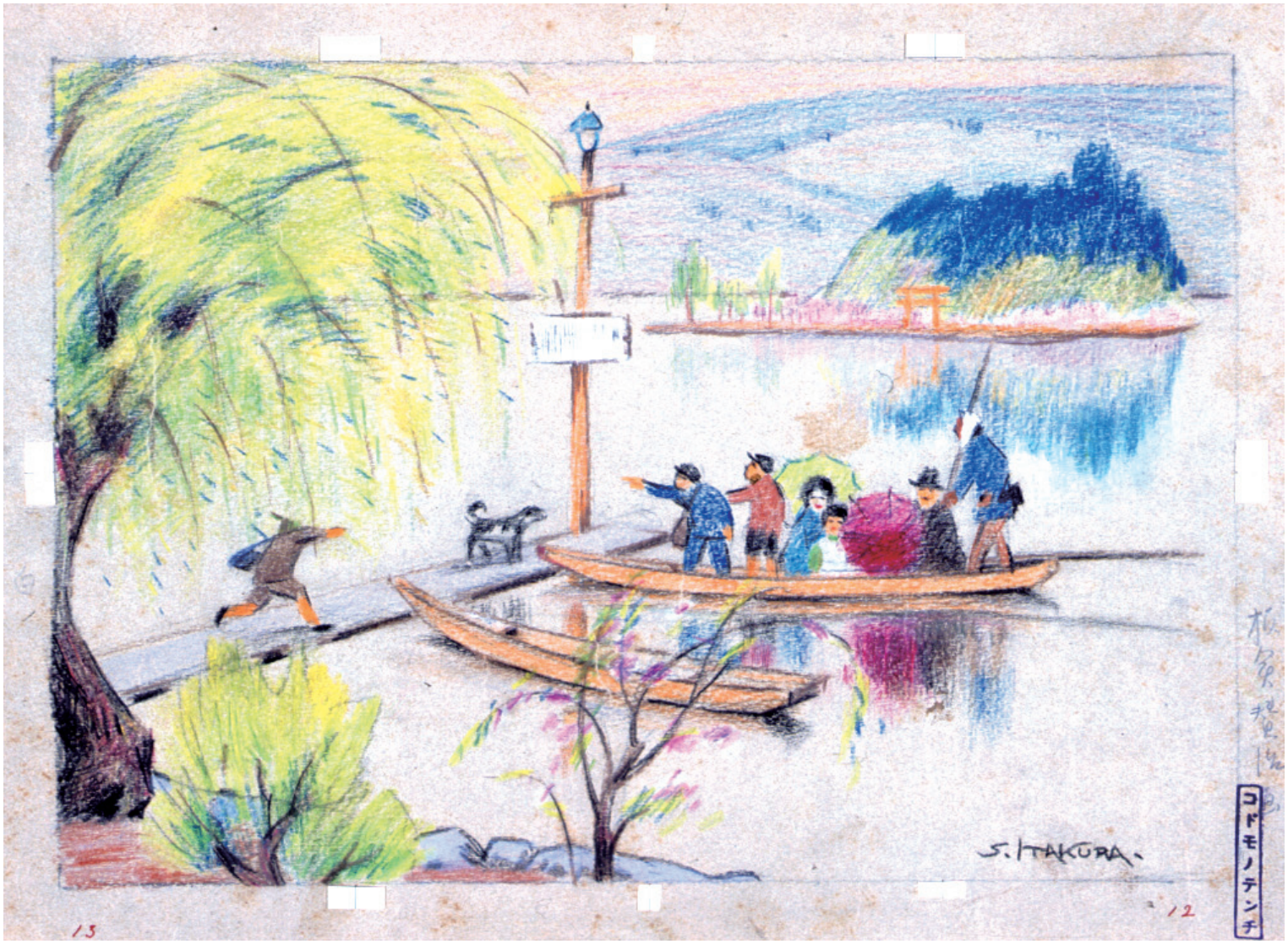
「何言ってるの？　一瞬で橋が高くなるわけないでしょう？」

お母さんは笑いながら言いました。

二人はおもちゃの住人なのです。この小さな人達はおもちゃ箱にいるときの記憶はありません。あなたが眠っているときと同じように。そして、人間の子どもたちのことはまるで透明人間のように見えません。

「もう、おもちゃを片づけなさい」

巨人のお母さんが言って、おもちゃは片づけられました。それは人間の子どもたちが遊んでいた家でした。



入選

夜祭り

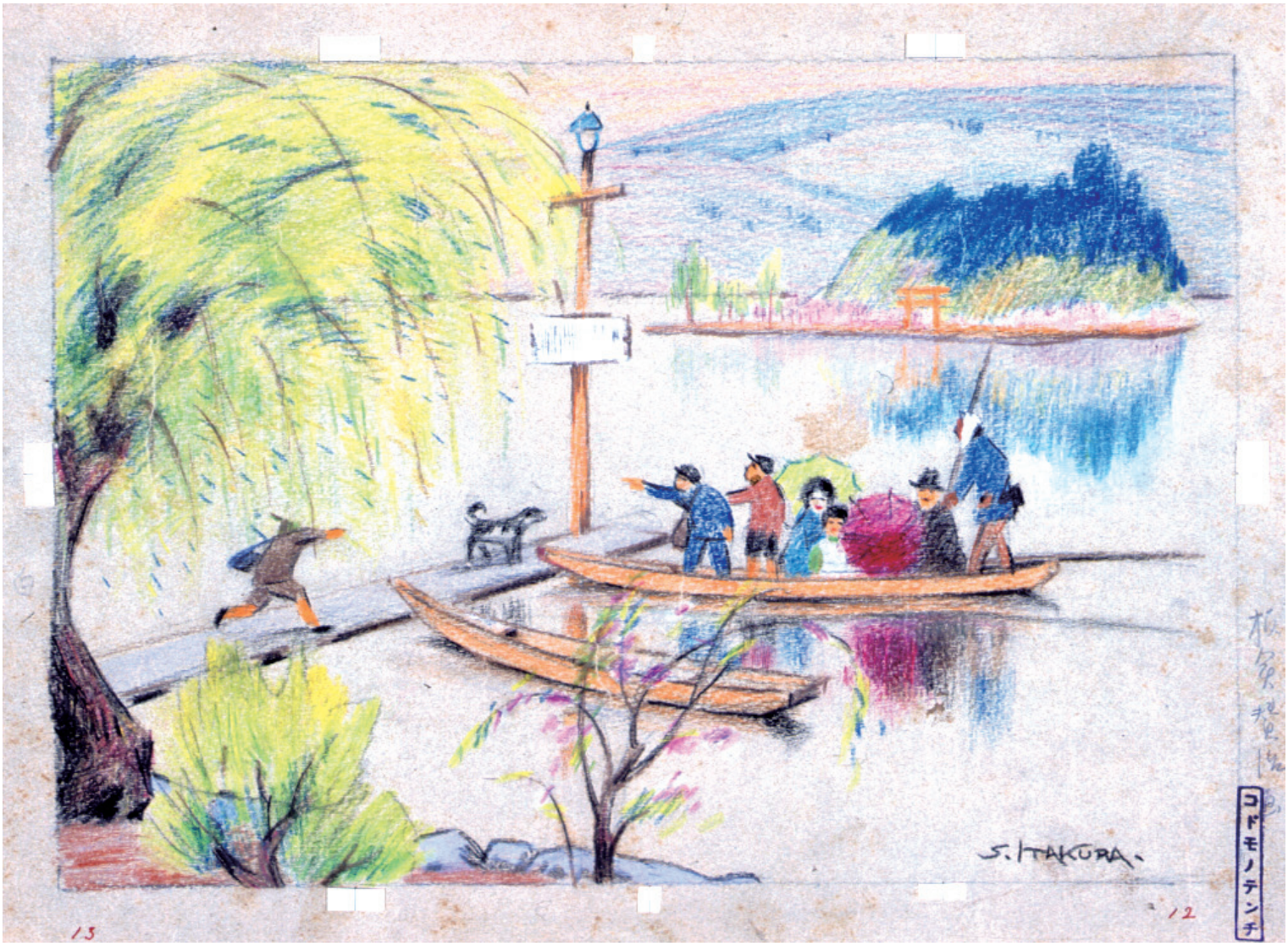
埼玉県春日部市　なんさく

あと少し陽が傾けば、桟橋のガス灯に火が入ります。湖の浮島にある神社では、夜祭りがはじまります。地元では、あやかし祭りといわれ、妖怪たちが姿をあらわします。その中に交じっている神様に話しかけられると、願い事が叶うという、言い伝えがあります。ですから、みんな楽しみにしています。

この時期に悪いことをすると、祟りがおきると、信じられています。ですから、お囃子の余韻が消えるまで、どろぼうや争いがなくなり、とても平穏に暮らせます。

「だいちゃん、こっち」

先週、都会から引っ越してきたばかりの、友達がやってきました。怖がらないといいな。この村が嫌いにならなければ、いいな。



入選

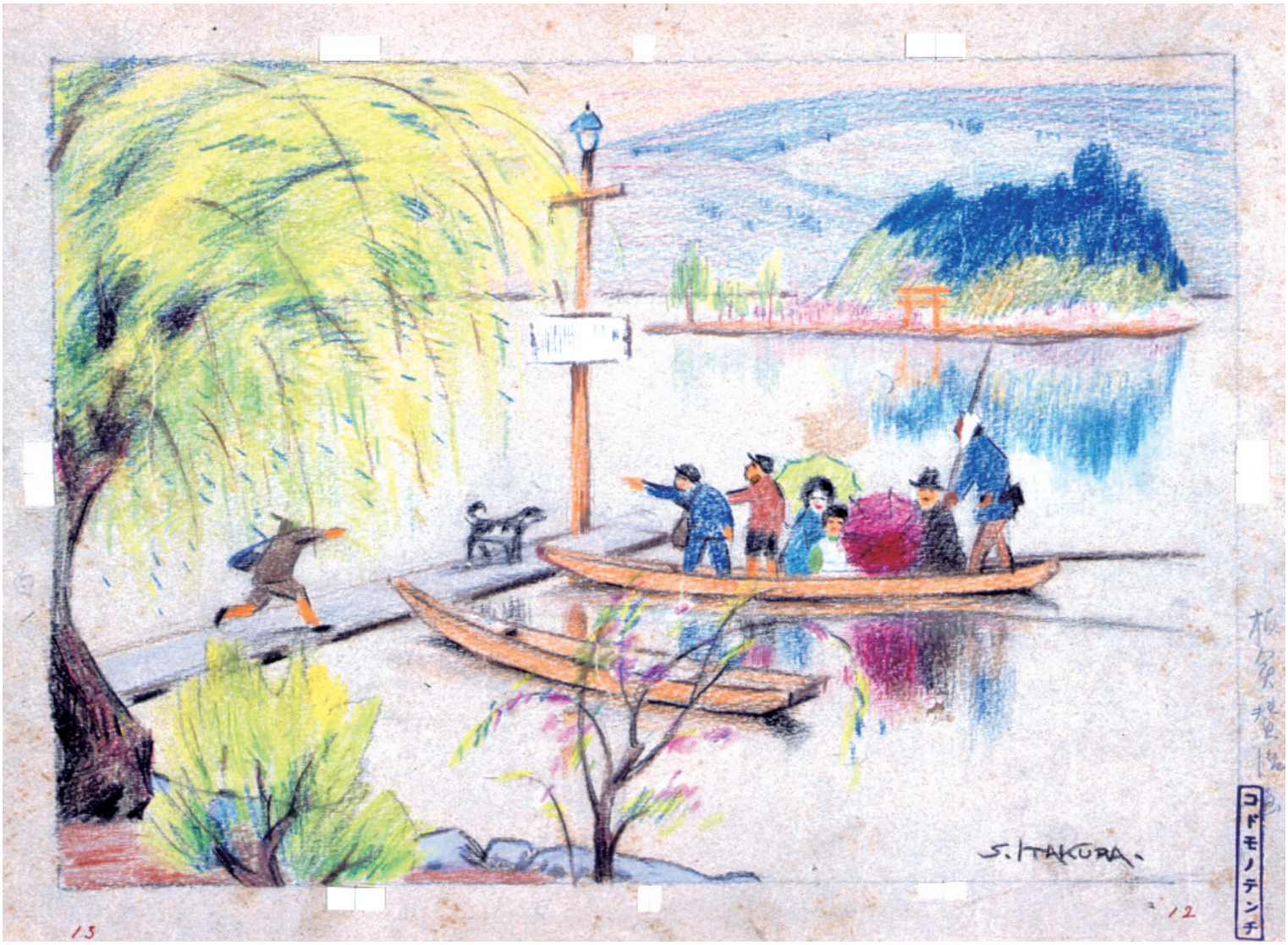
大阪府貝塚市　花園（はなぞの）　メアリー

邂逅

今日は娘の三つ詣りの日でした。

娘はうぐいす色の着物に白い被布をつけ、大はしゃぎです。親子三人で神社へ向かう渡し舟に乗りこんだとき、桟橋から「おーい、待ってよお」と声がして、一匹の犬と腕白そうな男の子が息せき切って走ってきました。「タケル」と名乗ったその男の子は舟に乗ると、晴れ着の姿の娘を見てニッコリしました。

神社につくと、犬はなぜかひとつだけ空になっていた狛犬の台座にひょいと上がって、そのまま二カリと口を開けたまま鎮座しました。そしてタケルはつむじ風のように、まっしぐらに本殿へ駆けこんでいったのです。驚く私に夫は立て札を指差しました。そこには「御祭神　日本武尊」と書かれてありました。



入選

ぼくの宝物

千葉県柏市　村竹（むらたけ）　恵子（けいこ）

この絵は、ぼくの宝物だ。おじいちゃんが描いた絵だ。

おじいちゃんのお姉さんが、舟で渡って嫁入りする様子を描いている。

おじいちゃんが話してくれた。お姉さんはこの唐傘の色がとても気に入っていて、この唐傘をさしてお嫁に行く日を楽しみにしていた。それで、この唐傘を描きたかったと。

持っている色鉛筆では色が足りなくて、どうしても三十六色の色鉛筆が欲しくて、結婚式の日は留守番を引き受けたのだと。三十六色色鉛筆にある「濃い赤紫」「紅樺色」で唐傘を仕上げて、この絵を完成させたそうだ。

今見ても、三十六色色鉛筆で描かれたこの絵は美しい。ちびた色鉛筆もぼくの宝物だ。